

### 1 自己評価及び第三者評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2893800017		
法人名	社会福祉法人 正久福祉会		
事業所名	グループホームまどか園		
所在地	兵庫県宍粟市一宮町福知1029番地		
自己評価作成日	平成22年7月26日	評価結果市町村受理日	平成22年10月4日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="http://www.kai-go-kouhyou-hyogo.jp/kai_gosi_p/informationPublic.do?JCD=2893800017&amp;SCD=320">http://www.kai-go-kouhyou-hyogo.jp/kai_gosi_p/informationPublic.do?JCD=2893800017&amp;SCD=320</a>
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 ライフ・デザイン研究所		
所在地	兵庫県神戸市長田区菟乃町2-2-14		
訪問調査日	平成22年8月2日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

形だけのアットホーム的な施設ではなく、誰もがグループホームまどか園の玄関を入ると「あったかく、入居者、職員が活き活きと生活できるホーム」を目指し日々努力している。介護サービス(方法)については正解はありません。職員一人ひとりの意見を尊重し、それぞれの考えを实践させる事で、職員も楽しく真剣に、又失敗しても自身で反省し次に繋げて行くと信じています。そうする事で職員個々の質が上がり、ご利用者の方も安心して楽しく生活できると考えています。そしてあくまでも自然体で、ごく普通の生活が送れるよう日々努力しています。

【第三者評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

建物は、各居室を含め共有空間の面積が広く、少人数での和みの団欒場所も要所に設置され、車椅子利用者にとっても安全な移動が出来るスペースが確保されている。また、天井も高く設計されており、明るくて風通しが良い。アイランド型のキッチンが利用者が使用し易いように高さにも工夫がされている。隣接する同法人の運営する福祉施設との連携状況も充実しており利点も多い(研修体制・災害時及び緊急時の協働体制・相互交流・合同行事等々)。法人理念を明確に掲げ、事業所の年間計画・目標設定も毎年度作成し、職員個々の課業に反映させていく仕組みが出来ている。建物周辺は傾斜地が多く、利用者の行動できる範囲は限られているが、敷地内で菜園や茶畑、花づくり等をしており、日常生活の中で季節感を満喫することが出来る。日常生活記録の様式にも工夫を施しており、利用者の個性に対応した書面作りが出来ている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、活き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および第三者評価結果

自己	第三者	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	認知症であったも、その人らしさを大切に、住み慣れた地域でより楽しく、安心して生活できるよう、ご本人、ご家族にとっても「安心ほっとステーション」として機能できるよう、日々努力をしている。	法人理念として、「あるがままに素直に生きる」と「今を積み重ねて、未来が開ける」の二つをホーム通信「えがお」を通じて伝えている。	今後の取り組みとして、法人の理念の下、地域密着型提供事業所としての独自の理念も加えて、作り上げることに期待をしたい。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	年2回、キャンパス全体で地域交流行事を実施している。又地元主催行事にも積極的に参加し、交流を深めている。	市の主催する行事にも積極的に参加しており、地域における核(基地)として発信をしている。地元自治会のふれあい喫茶にも参加し、法人としての祭り(ほわっとフェスティバル)などにより、地域との交流をしている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	市の介護福祉課主催の認知症介護者教室において、実践事例を交え講義。又毎月専門職の認知症勉強会の中でも事例発表しながら専門職としての知識の向上に努めている。又、中学生、高校生のボランティア学習も積極的に受け入れている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	自施設だけでなく、他の事業所の運営推進会議にも参加し、情報交換を行っている。	運営推進会議は2ヶ月に1回の頻度で開催されている。知見者や地域の代表も参加しており、報告や伝達を行っている。	今まで、独自の書式を用いて記録化していたが、統一報告書式①に変更している。今までの良い部分を残し、書式の改良を提案されてはどうか。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	運営推進会議は、必ず市担当者へ出席して頂いている。その中で、事業所の実情やサービスの取組を伝えながら協力関係を築くようにしている。	情報の交換を西播磨地区の事業所が集まって行っている。運営推進会議には市は必ず参加しており、協力関係を築いている。	事業所間で共有している課題を、今後、市へ報告するようにはどうか。
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束に関しては、園内研修の中でも「なぜ拘束は駄目なのか、何が身体拘束の対象になるのか？」等研修し、身体拘束をしないケアに取り組んでいる。	利用者の行動を抑制しない取り組みがなされている。玄関の鍵は、時間帯によって開放するようにしている。	
7	(6)	○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	高齢者虐待防止法については、園内研修にて管理者が講師をしキャンパス全体の職員に対し研修を行っている。	具体的な取り組みとして、家族による虐待事例なども扱っており、今後、家族や職員に対するメンタルケアなどにも繋げる予定である。	

自己	者 第三	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8	(7)	○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	過去に成年後見制度についての支援を行った事がある。現在は対象となる方はおられないが、必要があれば、専門家(リーガルサポート)に相談し、支援するようにしている。	成年後見制度についての理解が出来ており、相談支援の体制もあるが、活用するまでには時間がかかる。	成年後見制度を補完する意味で、日常生活自立支援事業の活用も今後、検討していくことに期待したい。
9	(8)	○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居・退居に際しては、ご家族と複数回お話をする機会を持ち、自宅も訪問し、不安や疑問について理解して頂いた上で契約・解約をするように努めている。	法人内の短期入所施設からの見学や、他の法人施設からの見学などもあり、その都度対応して説明を行っている。利用者本人との面接機会が少ない事が、今後の課題となっている。	契約前に雛形の書式を家族等に閲覧して頂く等、契約前の理解を促す取り組みも重要である。
10	(9)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	ご家族の訪問時や運営推進会議などの機会を活用し、意見などを言いやすい雰囲気作りに取り組んでいるほか、寄せられた意見や苦情については、管理者も含め職員で共有し、実践に活かしている。	利用者や家族からの意見を、市や運営推進会議に伝達している。アンケート結果からみて、家族とのコミュニケーションは問題なく出来ている。今後、ADLの低下に伴う対応が課題となってくる。	
11	(10)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	人事考課の個人面接、職場内会議など、職員の意見をくみ上げられるように、法人全体として取り組んでいる。	年2回、人事考課を行い、面接も数回行うことで職員の意見を取り入れるようにしている。今後、メンタルヘルスにも力を入れていく予定である。	介護職員として、現場での「やりがい」を通して、職員の個々の「生きがい」に繋がる仕組みづくりに期待をした
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	職員個々の努力や実績については、人事考課制度により適切に評価をし、又公平な評価ができるよう、毎月考課者訓練を実施している。職場環境作りについては、経営改善プロジェクト委員会を中心に働きやすい職場環境作りを行っている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	職員一人ひとりのケアの実践、力量については等級毎の職能要件書にて把握し、個々の能力の向上に努めている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	月1回、市のケアマネ協会主催の勉強会の参加を勧めている。多くの事業所、多職種での勉強会である為、昨年以上にネットワーク作りが出来ている。		

自己 者 第三	項目	自己評価	外部評価	
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>				
15	○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居申込の際、又入居前に実施する面接によって本人の希望や要望を把握するほか、入居直後は特に職員が関わる機会を増やし、本人の思いを受け止めることができるように努めている。		
16	○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居申込時から、ご家族(介護者)の思いも十分に聴くようにし、また入居後もご家族からお話を伺う機会を多く設け、その思いを受け止めケアに活かすことができるように取り組んでいる。		
17	○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入居申込みの際に、ご本人とご家族(介護者)の現状把握を行い、入居されるまでの期間のサービスについてのアドバイスを行っている。		
18	○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	職員と入居者は、日々の喜びや悲しみ等を共有できる関係を目指している。日々の生活の中で、職員は料理や掃除などの家事をはじめ、利用者から生活の知恵を学ぶことも多く、支え合う関係を築いている。		
19	○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	ご家族の面会時、入居者を交え、会話の時間を持ち、入居者及びご家族の方々と信頼関係が保たれる様にしている。又、昨年よりグループホーム新聞を発行し、担当者からご家族に対し近況報告を行っている。		
20	(11) ○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	昔の友人や近所だった方の訪問を歓迎している。その中で馴染みの場所などの思い出話をしてもらっている。又馴染みの人や場所についても職員がその情報を収集し、入居者と職員間でコミュニケーションを図る際にも活用している。	地域の人や、地元のショートステイを利用している人が訪ねて来ることもある。地区外のふれあい喫茶にも参加している。今後、自分の住んでいた家を訪問する機会を持つことを検討中。	地元で空き家になっている利用者の住宅等の活用ができると、馴染みの場所への外出の機会が増える。家族と相談の機会を持つことに期待をしたい。
21	○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	散歩などの外出時、また、日々の生活の中においても、できるだけ入居者がみなさんで過ごすことができるように配慮している。		

自己 者 第三	項目	自己評価	外部評価	
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22	○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	入院加療が長期化し、退居となった場合などはお見舞いに行っている。又年賀状、暑中見舞い等も送付している。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>				
23	(12) ○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日々の生活の中で、入居者一人ひとりの思いを把握するように努めている、また、意思の疎通が難しい方については、ご家族の協力を得て、ご本人の立場に立って検討するように取り組んでいる。	個人の社会的な役割や、心理面の背景などを考慮し、利用者や家族の思いを把握するように努めている。	職員の自己満足(個人の主観)に陥ることがないように、複数の職員の意見を参考にすることが望ましい。
24	○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	ケアにおいてはこれまでの生活歴を大切にしている。入居の際に自宅を訪問し、ご本人やご家族からお話を伺うほか、入居後も情報を得て、より良く知る努力を続けている。		
25	○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日々の生活の中で、職員が入居者一人ひとりの状態を、ご本人の視点に立つことにより全体的に把握できるようにしている。また、細かいことでも気付いたことがあれば職員間で情報を共有できるようにしている。又体調面で変化があった時は、訪問看護師にも報告、相談を行っている。		
26	(13) ○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	ご本人の希望、ご家族の願い、医師のアドバイスなどを考慮し、ご本人にとってより良い介護計画を作成するように取り組んでいる。	利用者本位の介護計画を作るために、すべての職員の持っている情報を共有するように努めている。本人の意向を確認することは当然として、家族の願いや医師のアドバイスなども考慮している。	インフォーマルなサービス提供を計画に取り入れて行くように検討されては如何でしょう。
27	○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	一人ひとりの日々の様子を記録(パソコン入力)し、ちょっとした気づきや変化も細かく記録している。更に重要な内容については、申し送りの際に再度説明する等、職員間で情報が共有できる仕組みを作っている。		
28	○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	併設のデイサービスとの合同行事、交流会等を実施し、利用者間の交流、生きがい作りに努めている。		

自己 者 第三	項目	自己評価	外部評価	
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29	○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	運営推進会議に、地元自治会長、民生委員の方も出席されており、その中で入居者の日々の生活を豊かにする為の協力を得たりしている。		
30	(14) ○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	ご本人・ご家族の希望に応じて、これまでのかかりつけ医、または近隣の委員や協力医療機関より医療を受けられるように支援している。また、これらの医師には職員よりホームでの日常生活の様子を伝えることにより、適切な医療が受けられるように支援している。	現在往診をしてくれている医師は3人おり、1回/週～1回/月と状況によって違うが、緊急時の対応は出来ている。また、定期的な通院は家族によって支援されている。	
31	○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	入居者の方の体調の変化等については、日々の関わりの中で職員一人ひとりが気づき、又その情報を共有できるようにし、疾病の早期発見、予防に努めている。又常に主治医、訪問看護ステーションとの連携を図りながら、日々の健康管理に努めている。		
32	(15) ○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入居者の入院に際しては、スタッフが時間を見つけてお見舞いに行っている。又早期退院を目指して、病院(地域連携室)やご家族も含めて情報交換や相談に努めている。	地域に適切な医療機関がない場合、管理者が主に動いて調整している。同じ法人の訪問看護ステーションとも連携をしながら、情報交換をしている。利用者との関係維持には、スタッフが自発的にお見舞いなどにも行っている。	
33	(16) ○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	看取りの指針を作成し、入居時に説明を行い、重度化した場合や終末期のあり方について、ご本人・ご家族・主治医と繰り返し話し、方針を共有するように取り組んでいる。	今年度も、一人看取りの実績があり、訪問看護ステーションとの連携で対応をしている。看取りの指針はあるが、ケースバイケースによる困難さと医療との連携面での不安があり、職員間の話し合いをしている。	今後、地域医療との連携が期待されるが、拠点の医療機関が縮小していく中で、行政との連携を重要視して頂きたい。
34	○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	事故発生時の対応、救急対応については、園内研修で繰り返し学んだり、訪問看護ステーション看護師に直接指導を受けるなど、緊急時に備えている。		
35	(17) ○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	法人の防火管理計画のもと、2か月に1度防火訓練を実施している。非常災害時に利用者の安全を守るように、日々意識を高めている。	防火訓練を法人内で持ち回りとしており、2ヶ月に1回の割合で実施している。また、消防訓練の後に運営推進会議を開催する等、運営上の工夫がなされている。	

自己 者 第三	項目	自己評価	外部評価	
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>				
36	(18) ○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	プライバシーに関わることについては取り扱いに細心の注意を払っている。個人情報保護に関しては法人で個人情報保護委員会を開催し、個人情報保護規定を作成し、それののった対応を行っている。	法人全体として、個人情報保護委員会を開催しており、各事業所から研修に参加している。契約時にも、個人情報保護に関する同意をもらっている。	
37	○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	利用者が希望を言えるよう聞き出したり、説明を行ったり、自分で決め納得できるように支援している。また、言葉で意思表示が出来なくても、表情や反応などをよく観察し支援している。普段の声掛けにおいても自己決定を支援するように努めている。		
38	○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	1日のスケジュールは原則決めていない。一人ひとりのペースを大切にして、楽しく過ごせるように希望も聞き、その方らしく暮らして頂いている。		
39	○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	入居者の好みに合った服装や身だしなみをここに支援している。また、その人らしいおしゃれをして頂いている。理容・美容は好みに応じて訪問理美容を利用したり、ご家族とともに、ご本人のこれまでの行きつけの店を利用したりしている。		
40	(19) ○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	食事作りは入居者の方の嗜好を聞きながら調理したり、自家栽培野菜を調理することで、生きがい作りに努めている。又重度の認知症の方についても1対1で関わる(野菜を刻む)事で、よい表情も見られている。	配膳や片付けは勿論のこと、おやつ作りや外食も取り入れ、食事を楽しむ視点での取り組みがされている。日曜日には、利用者を交えてのメニュー作りもしており、夏には恒例のソーメン流しが好評であった。	盛り付けによる変化や、調理のプロセスに参加する意識を持つことで、利用者の日常生活動作に繋がる支援を継続したい。
41	○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事の摂取状況を毎日チェック表に記録している。水分に関しても、声掛け、介助を行い、水分不足にならないように気をつけている。		
42	○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	入居者一人ひとりの状態に応じて、適切な口腔ケアや声掛けを行い、口腔内の衛生に注意している。毎食後に口腔ケアの声掛け、介助を行い、就寝前には義歯洗浄を行っている。更にうがいが必要な方については、歯磨きティッシュ等で口腔ケアを行っている。		

自己	者 第三	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(20)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	ひとりひとりの排泄時間や習慣を把握し、トイレ誘導を行う事でトイレでの排泄を促している。又排泄の訴えない方に対しても、ポータブル介助を行い、おむつ内での排泄を減らすように努めている。	夜間でも、出来る限りトイレ誘導を行っており、下肢筋力の低下防止に努めている。トイレの自立が、個人の尊厳を守るために役立っている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	まめに水分補給を行ったり、2日に1回は牛乳を飲んで頂きながら便秘の予防に取り組んでいる。		
45	(21)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	基本的に入浴日は決めている。入浴前には一緒に入浴後の衣類を準備(選ぶ)する事で、入浴の楽しみ、入浴をするという事を理解して頂く事で、快適に入浴して頂くことを心がけている。	月曜日から土曜日までの午後を使って、週に3回の入浴の機会を確保している。利用者の体調が悪いときは、シャワー浴や足浴に切り替え、入浴時における対話記録もきちんと残されている。	入浴拒否の利用者への対応で苦慮したご場合等、利用者の立場に立って考えてみる習慣も大切にしていって頂きたい。
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	入居者にあつた休息や睡眠をとれるように支援している。一律の睡眠時間などは設けず、一人ひとりの生活のペースを尊重している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	入居者一人ひとりの服用している薬に関する情報を全職員が共有できるように、薬局発行の内服一覧をファイルに挟み、変更があつた場合は申し送り簿に記載するなど、全職員が服薬に関する情報を共有できるように努め、副作用や身体状況の変化に常に注意を払っている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	他事業所との交流会を実施したり、併設施設での行事やクラブに参加している。又最近では音楽療法を取り入れ、ホーム生活の楽しみを増やしている。		
49	(22)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそつて、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	できる限り入居者誰もが外出できるように配慮している。地域のイベント等のチラシがあればリビング内に掲示し、希望があれば外出できるようにしている。	自治会に加入しており、色々な案内が入ってくる地域のイベントを活用し出かけるようにしている。地元自治会が行っている「八朔祭り」や農協のマーケット、ホームセンターなどに出かけることで顔見知りも増えている。	

自己	者	第三	項目	自己評価	外部評価	
				実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50			○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	基本的に金銭管理は職員が行っている。但し外出する際にはカバンや財布を持って頂き、外出先で気に入った物があれば購入できるように配慮を行っている。		
51			○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	電話の希望があった時は、公衆電話の使用や、事務所の電話を利用して頂いている。		
52	(23)		○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	リビングには、くつろげるようにソファを設置したり、「生け花」「習字クラブ」の作品を展示している。共同のテレビについても2ヶ所設置し、好きなテレビ番組を観れる配慮もしている。	共用空間の各コーナーに、ソファやTVが設置されており、利用者の寛げる場所が確保されている。廊下が広く天井が高いので開放感がある。屋外に通じるバルコニーでは、洗濯物や植木、水槽なども置かれている。周辺の畑にはお茶の木が植えられている。	
53			○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	共用空間の中にも、大勢で賑やかに過ごせる場所、2~3人でゆっくり過ごせる場所を作り、入居者の居場所を数多く設けるように努めている。		
54	(24)		○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室については、ご本人が使われていた物、又ご家族が面会に来られた際に、ゆとりと寛げる為の物品を自由に持ってきて頂くようにしている。	各部屋には、洗面とベッドが設置されており、室内からの施錠も出来る。出入り口の扉の幅が広く大きい。利用者が寛げる馴染みの物も家族に持ってきてもらっている。	利用者が部屋に閉じこもりがちにならないように、活動や会話をする機会を多く持つていくことに期待したい。
55			○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	それぞれの居室が解るよう、表札は大きな文字で入居者の方の目線に合わせている。キッチンも調理、洗い物がしやすいよう低めにしている。洗濯物を干す場所も自由に使える(出入り)ように配慮している。		